忘れ去られてしまった日本の美

ゆく河の流れは絶えずして、
しかももとの水にあらず
絶えず流れる河の急流に、
変わらぬ本質を見たのは鴨長明だが、
これを不易流行の理念へと高めたのは、
江戸時代の俳聖松尾芭蕉だった。

日本人は古来より四季の移ろい、
花鳥風月にあはれを覚え、
時の流れのなかに侘び寂びを見いだした。
神が宿るとされた森から切り出された木は
人間たちが住む家へ姿を変え、
何百年、何千年とこの国をつくってきた。

悠久の歴史のなかで変わるものは変わり、
変わらないものは変わらずに残る。
これを俳諧の世界では不易流行という。
例えば森は、何十年と変わらずに
そこに存在し続けているように見えるが、
実際はいくつもの小さな生と死の往還のなかで
絶えず変化を続け、その美しさを保っている。
伝統や文化も同じだ。
いつまでも変わらないもののなかに変わりゆくものがあり、
時代とともに受け継がれていく。

しかし戦後、経済成長と効率ばかりが優先された結果、
日本人の美や価値観は、いつのまにか
途絶えてしまったように思う。
街には看板が溢れかえり、
規格化された家々が所狭しと建ち並ぶ。

21世紀は、高齢社会となり、経済成長にも陰りが見え、
社会には相変わらず不安が絶えない。
今、私たちに求められているのは
便利さや効率だけではなく、
美しいものを築き、愛で、残していくことではあるまいか。
人は美しいもののなかで生きることで、
その生をいっそう輝かせることができる。

何も昔に戻ろうという話ではない。
日本人が築いてきたこの国に、家づくりを通して、
これまでに大切にしてきた美を取り戻していきたいのだ。

石出和博